

遠隔授業観察システムを利用した学部授業実践

— 実地教育VI・XI（英語科）の場合 —

山森直人*

本稿は、2005年度「実地教育VI/XI（英語科）」において学校教育学部小学校・中学校教員養成課程英語科教育コースの学生を対象に行われた遠隔授業観察システムを利用した授業実践について報告することを通して、同システムの利用上の課題と使用の方向性を探ることを目的としている。そこでまず(1)同システムが導入された経緯と、(2)活用の方向性の概要を述べる。次に(3)同システムを鳴門教育大学学校教育学部授業科目「実地教育VI・XI（英語科教育）」において試行的に使用した授業実践について報告する。そして最後に(4)遠隔授業観察システムを活用していく上での検討すべき課題と使用の方向性について示す。

〔キーワード：遠隔授業観察システム，教育実習事後指導，英語科教員養成，教室英語〕

1. はじめに

鳴門教育大学では2004年度より遠隔授業観察システムが導入され、2005年度よりその利用の促進が図られている。遠隔授業観察システムは同大附属学校園とのあいだにある距離の問題を克服することを主要な理由に設置されるに至った。いまだ試行段階にあるが、今後このシステムを通して今以上に質の高い教育活動および研究活動を実施していくためにも、活用事例を蓄積・共有し、同システムの有効性を検証していく作業が必要である。

本稿は、2005年度「実地教育VI/XI（英語科）」において学校教育学部小学校・中学校教員養成課程英語科教育コースの学生を対象に行われた遠隔授業観察システムを利用した授業実践について報告することを通して、同システムの利用上の課題と使用の方向性を探ることを目的としている。

2. 遠隔授業観察システムの活用の方向性

遠隔授業観察システムの活用の方向性について、山森他（2005）では、鳴門教育大学学校教育学部において情報処理の専門教員、実地教育担当教員、及び、教科教育担当教員が協働して本システムの活用の大枠を検討し、その上で、教科教育担当教員（社会科、図画工作・芸術科、家庭科、英語科）がそれぞれの担当授業における遠隔授業観察システムの利用方法を自らの授業経験をふまえて構想した。その際、共同執筆者の草原和博氏の提案

により、①教育活動及び研究活動の目的・課題と、②目的の実現や課題解決に同システムが果たし得る機能を結びつけることで、同システム活用のあり方が類型化された。以下にその概要を示す。

まず、①目的・課題は「学生の教育実践力の育成」と「教員の教育・研究環境の改善」に分類された。さらに前者は「導入教育」「実習前教育」「実習後教育」に、後者は「附属学校教員の環境改善」と「大学教員の環境改善」に下位分類され、それぞれの具体的な目標と課題が提示された。

一方、新システムの②機能は、大学から附属学校園で行われる教育活動を観察する「遠隔観察機能」、大学側と附属学校園側において双方向に対話をする「相互対話機能」、遠隔操作を通して附属学校園の教育活動のデータを学内のハードディスクに保存する「情報蓄積機能」の3つの機能に分類された。

以上の①教育及び研究活動の目的・課題と②システムが果たしうる機能とを関連づけ、システム活用の諸類型が提示された。詳細に関しては同著を参照されたい。

このシステム活用類型をもとに具体的な活用例が提案された。特に英語科については、筆者が担当あるいは担当予定の授業科目から、導入教育にあたる「英語科教育論Ⅰ」、実習前教育にあたる「初等中等教科教育実践Ⅲ」、実習後教育にあたる「実地教育VI/XI」（筆者は後期を担当）について、上記活用類型をもとにシステムの活用方法を構想した。例えば、「英語科教育論Ⅰ」については次のように構想した。

* 鳴門教育大学言語系（英語）教育講座

1) 「教科指導のようすを観察し分析できる」力量を養うための遠隔観察機能の活用

○科目名：「英語科教育Ⅰ」

○テーマ：英語教師に求められる基礎的知識と思考力の育成

○システム利用の位置づけと授業構成例：

本講義は、専門的知識と実践的指導力を備えた英語教師に求められる基礎的知識（用語や理論）や思考力を育成することを目的とする。英語科教育コース2年次生がはじめて英語教育学について学ぶ機会でもあり、具体的には次の点を重視する。①基礎的用語・理論を獲得する。②基礎的用語・理論を体系的に整理する。③学校英語教育の現状を基礎的用語・理論を用いて把握する。④学校英語教育の現状について、基礎的用語・理論を用いて思考し、その問題への意識を高める。

以上の目的を達成する過程において受講生の立場を「英語学習者」から「英語指導者」へと転換しつつ、両立場から英語教育について「語る言葉」を養いたい。そのためにも「座学」的な志向性を有する上記①②を、常に③④と有機的に関連づけたい。

これまでは第二言語習得研究における専門用語や理論、例えば「インプット仮説」や「アウトプット仮説」などを扱う際、単なる知識レベルの理解にとどまり、その理論の現実的な意義を受講生に十分に理解させるには至っていなかったように思われる。しかし、同システムの「遠隔観察機能」を用いれば、附属校の英語授業における教師の英語発話（インプット）やコミュニケーション活動時の児童・生徒同士の英語発話（アウトプット）を観察することが可能となる。この機会を通じて、教師や生徒によるインプットやアウトプットの意義について考える機会を提供することが可能となる。また、インプットやアウトプットの量を増やすための教師の工夫や、それらの質を改善する方法などについて、実践を踏まえながら理解することができる。

さらに、小学校における英語活動の普及から、指導者の養成が至急求められているが、現受講生には小学校で英語活動を経験している者が少ない。このような学生には、同システムの「遠隔観察機能」を通して、附属小学校における英語授業に児童とともに参加し、英語活動を実際に体験すると同時に、学習者の立場から英語活動を考える機会を提供することも可能である。

このように教科ごとに授業担当者の経験をもとに遠隔授業観察システムのあり方が構想された。しかし、いまだ実際にシステムを用いた授業を行い、その効果を検証するには至っていない。2005年度は効果を検証すべく、筆者が担当する「実地教育VI/XI（英語科）」において実際に同システムを活用した。次節ではその一連の展開を報告する。

3. 遠隔授業観察システムを利用した授業事例

遠隔授業観察システムを鳴門教育大学学校教育学部授業科目「実地教育VI・XI（英語科教育）」において試行的に使用した。

3.1 「実地教育VI・XI」の概要とシステムの利用

本授業はおもに3年次生を対象に、前期前半にXI、後

半にVIが実施され、附属学校園での教育実習（実地教育V）を挟み、後期前半にVI、後半にXIが行われる。筆者がおもに担当する後期は、教育実習（実地教育V）を振り返り、英語授業を実施する上での受講生自身の課題を発見し、その解決案を考えることを目的としている。具体的には、附属学校における教育実習中にビデオ撮影した実習授業の映像を受講生が個人または同コースの学生とともに視聴することを通して、授業中の自身の行動や発話、思考を相対的に振り返り、個々人の課題（コミュニケーション活動、発問の仕方、教室英語、等）を把握させている。その後、その理論的解決案を構想し、ときには模擬授業による課題解決案の検証を行ったこともあったが、学生に課題解決の十分な実感を与えることはできなかったように思われる。しかし、同システムの「相互対話機能」を活用すれば、学生が提起した課題や解決案に関して附属教員から現状に即した助言を得ることが可能となる。また「遠隔観察機能」を用いることで、同教員が同じ課題に対して実際にどのように対処しているのかを観察することが可能となる。

3.2 2005年度のねらい—教室英語について考える—

今年度は受講生の「教室英語（Classroom English）」に関する知識・技能を育成することを中心に授業を展開した。その理由は次の通りである。英語科教育コース学生の中には、3年次9月に実施される教育実習（実地教育V）を通して自分自身の英語力に自信をなくしたという感想を抱く者が多く、そのため実習後に英語力を伸ばそうと英語資格試験の受験や留学を考える者も多い。その意気込み自体は喜ばしいことである。しかし、教師の英語力と指導力との間に必ずしも明確な相関関係が認められてはいないことを考慮すると、英語科教員を志望する学生に、本来英語科教員に求められる英語力とは、いわゆる英語資格試験で測定可能な能力ではない（資格試験の得点が高ければ英語指導力が向上するとは限らない）こと、および、それがどの様なものであるのかについて考えさせる必要がある。そこで、教室英語を本授業のテーマに取り上げた。

1) 「教室英語（Classroom English）」とは

教育実習「教室英語」とは、英語の授業において使用される英語のことをいう。垣田（1981, p.94）は授業面で使用される教室英語として次の点を挙げる。

- ・始業の挨拶
- ・天候、曜日、生徒の日常生活などに関連した問答
- ・出席の点呼
- ・学習活動についての指示や命令
- ・教材内容についての問答や説明
- ・生徒に与える注意、ほめことばや激励を含む評語
- ・宿題の指示
- ・終業時の挨拶

また、安藤（1991）は教室英語を使用する際の3つの留意点を、望月（2001）は教室英語の7つの工夫点を、挙げている。

- ・教室英語がむずかし過ぎて一部の生徒を置き去りにして授業が進められないことがないように注意しなければならない。
- ・教室英語は教室内だけで通用する特殊な英語であってはならない。
- ・教室英語は動作の指示や授業進行上の作業の指示を表すものが多く、先生が発話し生徒が聞き取るという一方通行型のものになりがちであるが、生徒が発話の機会を持てるような形にする工夫が必要である。

（安藤，1991，p.199）

- ・複文より単文でつなげるなど、できるだけ負担の少ない文構造を用いる。
- ・未知語が入らないようにするなど、学習者の語彙量も考慮する。
- ・時折、身振りや手振り、あるいは Yes/No などで答えさせ、学習者の反応をみる。
- ・学習者の表情をみながら、理解に合わせてゆったりとした速度で話す。
- ・口を大きくあけはっきりと話し、大事な情報が入っている部分などは強くゆっくり発音したり、イントネーションを変える。
- ・1度話ただけで学習者が理解したと考えず、パラフレーズするなど、落ちこぼれないような工夫をこらす。
- ・学習者が母語で既に知っているようなことがらも話の中に織り込み、背景知識を活用する。

（望月，2001，pp.51-52）

また、渡辺（1995，pp.181-196）や渡辺他（1988，p.17）は、S. Krashen のインプット仮説に基づき、理解可能な英語インプットを英語授業において実現するための方法として、MERRIER アプローチを提唱している。同アプローチでは次の点に教師が留意して英語を話す必要性が説かれている。

- ・ *Miming (or Models)*: できる限り身振り、表情を交え、実物や視聴覚教材などを援用しながら話す。
- ・ *Example*: 「抽象の梯子」を上下しながら話す。すなわち具体的な例を挙げながら生徒の理解を深めていく。
- ・ *Redundancy*: 1つの事柄の意味を伝えたい時に様々な言語表現を用いたり発想を変えるなどして、理解を一層容易にする工夫をする。
- ・ *Repetition*: 必要と思われる表現や内容は繰り返し使う。
- ・ *Interaction*: 教師が長々と一方的に話すのではなく、生徒とともに新教材の内容に迫る心掛けを持つ。
- ・ *Expansion*: 目立った形の correction は避け、何食わぬ顔

で修正し、復唱してやる。

- ・ *Rewarding*: 生徒の response に対しては質の如何を問わず何らかの肯定的な評価をしてやらなければならない。

本授業では、MERRIER アプローチを、受講生に獲得させる教室英語の分析観点の基礎とし、授業の進展にともない発展的に検討することにした。

2) 2005年度授業のねらいと授業展開

2005年度は次の3点をおもなねらいとした。

- ①教室英語を使用する意味を知る
- ②教室英語の機能を知る
- ③教室英語を分析する観点を得る

上記のねらいを、英語授業実践のビデオの視聴、及び、理論的な説明、を通して達成することを目指した。特に、教室英語を分析する観点（上記ねらい③）は理論的説明では十分に獲得することはできないと考えられたため、ベテラン教師の授業をビデオ視聴することを通して、受講生自ら分析させ、気づかせることに主眼をおいた。また、その際、教室英語の分析観点をより効果的に広め・深めることを目的に、受講生同士がお互いの気づきを共有する機会を本授業内外で設けた。教室英語については結果的におおよそ次のような流れで授業を展開した。また、遠隔授業観察システムは展開4）において使用された。

- 1) 教育実習時の教室英語の振り返り (11~12月)
- 2) 附属教員の教室英語の特徴分析 (12~1月)
- 3) その他教員の教室英語の特徴分析 (1~2月)
- 4) 附属中学校の遠隔授業観察 (2月15日)
- 5) 教室英語の理論的枠組みの構築 (2月)
- 6) 教育実習時の教室英語を再度振り返る(2~3月)

3) 本時（2006年2月15日）のねらい

受講生の教室英語に関する分析観点を育成することを目的に、遠隔授業観察システムを用いた試行授業を行った。同授業のおおよその展開は次の通りである。

- (1)本時の概要と観察視点・分析観点の説明(8:45-8:55)
- (2)遠隔授業観察 (8:55-9:40)
- (3)感想の共有 (9:40-10:20)
- (4)本時のまとめ及びアンケート実施 (10:20-10:30)

また観察前に授業観察の視点として次の2点を提示した。

- ①授業者が使用する教室英語の特徴
(MERRIER Approach にもとづいて)
- ②授業展開に応じてどのような教室英語が使用されているか。

今回観察の対象となった授業は次の通りである。

鳴門教育大学附属中学校1年「英語」

時間：2006年2月15日 1限目(8:55-9:40)

場所：同校3階 第2マルチメディア室

授業者：同校英語科 森 宏子教諭

授業展開：

1. 単語テスト (10分)
2. Review 前時の板書 (5分)
3. Today's Target “Can you ~?” (10分)
4. Textbook (15分)
5. まとめ or アクティビティー (5分)

この展開案は、授業担当教諭から事前に伝えられ、受講生には観察当日、資料として配付した（同資料には教室英語観察の観点としてMERRIERアプローチの7項目も掲載）。また同時に、学生が授業展開に応じてメモ書き可能なように展開を項目立てしたプリントも配布した。

3.3 結果1 一遠隔授業観察システムを通して受講生が読みとったもの

観察後は、受講生を4人グループに分け、グループリーダー中心に授業全体の感想を述べた後、授業観察の2つの視点（①授業者が使用する教室英語の特徴（MERRIER Approachにもとづいて）②授業展開に応じてどのような教室英語が使用されているか）から意見や感想を共有させた。その後、各グループの代表者にグループ内の意見の概要を発表させ、グループ間で共有した。課題として、「森先生の教室英語と実習時の自分自身の教室英語とを対比して感じる」というテーマで小レポートを提出させた。以下に、その内容を示す。

- ・先生の教室英語はあらゆるところで使われていて、感心する部分が多くありました。それに比べると、私の授業は教室英語の数が断然少ないものでした。また、先生は生徒のレベルや授業の進度に合わせて英語を使い分けていたように思います。次の活動に移るときには、“We are going to ~”という表現を使っていて、復習も兼ねた内容をうまく取り入れていたと思います。私の場合は、子どもたちがどの程度理解できるのかということ把握しきれていなかったもので、こちらが思うがままに授業を進めてしまいました。（改行）また、先生はできるだけ英語で指示や説明等を行っていましたが、それも見習わなければならない部分だと思います。英語での指示等が子どもにとって難しいものであったとしても、ほかの表現で言い換えるなどして、できるだけ英語で授業を進めようとする意志が私にはまだまだ足りないと思いました。
- ・先生のさりげないターゲットセンテンスの導入がすごいと思った。漢字を用いてCan you read-?というのをくりかえし、生徒もクイズ感覚で楽しみながら授業に入っていた。ターゲットセンテンスを自然に導入するために、教室英語をどう取り入れていくかを構成する技術を感じた。指示語や共有の表現は日本語での訳や説明をせず、文法など生徒に分かりにくい表現を英訳してバランスよいサポートだった。私の場合は日本語の割合がかなり多かったと思う。Mimingは授業でも意識していたが、日英の切り返しは構成が薄く、行き当たりばったりの教室英語になっているところがあった。発問や質問のなど、きな授業の柱を明確にし、どう日本語・英語を組み込んでいけるかが大切だと感じた。
- ・森先生の教室英語と、実習時の自分自身の教室英語では、

まず、その量が全く違っていました。私はどうしても、英語が苦手な子でもわかるように、という意識があり、ゲームのルール説明などはほとんど日本語を使っていたように思います。子どもが理解できるように日本語を使うよりも、MERRIER Approachを意識して教室英語を使うことが大切だと実感しました。また、教室英語のバリエーションもとても少なかったと反省しています。それだけでなく、森先生は教室英語をただ使っているというのではなく、一言一言に感情を込めて使っていたように感じました。私は、とりあえず英語を話すことで精一杯で、子どもをほめるときにも、いつも同じ表現ばかり使っていたし、声も単調になっていたと思います。教室英語を使うこと、というより、英語を話すこと自体に慣れていないせいか、気持ちを込めて話せていなかったと思うので、来年の実習では、教室英語で子どもたちに指示するだけでなく、気持ちをしっかり伝えられるようになりたいです。

- ・森先生の授業と比べ、自分の授業はテンポの悪さが目立つなあと思いました。森先生は、ごくごく自然な流れで英語を使ってらっしゃいましたし、また2、3文続けて話していらっしゃいました。それに比べて私は、次に言う内容を思い出そうとしていたためか、とても不自然な、ぎくしゃくした英語だったと思います。また、ある事柄を伝えたいときに、使う単語や表現を変えて言い直す(③ Redundancy)のではなく、同じ文章をただ数回繰り返していただけでした。（改行）また、今回の授業ではあまり見られませんでした、⑥ Expansionについて、気をつけなければならないなあと思うようになりました。例えば生徒が、三単元の“-s”を抜かしたり、動詞の時制を間違ったときには、これまで私は、けっこう目立つような形で指摘してきたからです。そうした方が生徒の印象に残りやすく、生徒も間違いに気づきやすいのではないかと思ってそうしてきたのですが、毎回それをすると、皆の前で？発表するのが嫌になる生徒も出てくるのでは…と、今更ながら思うようになりました。来年度の協校実習では、この点に気をつけて臨むようにしたいです。
- ・森先生と自分の教室英語を比べると、あまりに違いすぎて何がどう違うか書ききれないと思いますが、やはり量やスピードが圧倒的に違っていました。自分があびせるインプットの量も、生徒自身のアウトプット（今回はそんなに無かったですが）も違っていました。（改行）活動や文法説明、フィードバックなどできるところは英語でしたいと思う一方、その場でうまく言葉が出てこず、いつも“OK!”や“GOOD!”しか言えず、実習中に生徒とのインターアクションを大切にと言われたことを思い出しました。生徒もそうですが、自分もリラックスしていないと自然と英語を話すことはできないと思います。私はまだまだ英語の知識も引き出しも少ないので、授業の前にはMERRIERアプローチを考えて、そのとき使えそうな教室英語をリストにするなどの努力が必要だったと感じました。（改行）私は実習中いつも同じ早さ（しかも大分ゆっくり）で話してました。自然な早さでし[ゃ]べったり、生徒に意識して欲しくてゆっくり何回も繰り返したり、場面によって教室英語の使い方を変えるということもできてなかったです。そのときに教室英語を使う目的をしっかりと考え、効果的に教室英語を話せるようになりたいと思いました。
- ・まず森先生の教室英語は、一時間を通して計画的に用い

られていると感じました。僕はとりあ[え]ず使えるような教室英語を使えるときにしか使っていません。英語授業の雰囲気作りという観点からしか考えられていなかったように思います。(改行) 本時の授業に必ず用いる教室英語を、森先生は用意していたので、授業における教室英語に筋が通っていたと思います。(改行) 森先生の授業は、日本語と教室英語とがうまく融合している印象を受けます。ツッコみやつぶやきのいたるところに、森先生らしさや指導観が表れていたと思います。中学一年生は本格的に文法を習い始めたばかりであるので、ある程度日本語も用いながら楽しい授業をしたらいいのかなと感じます。僕は説明をするときにはそれに必死で、日本語ばかりになってしまいました。(改行) 最後に、やはり生徒の実態と照らし合わせて教室英語を用いるように心掛けたいと思います。

上記の学生の小レポートを通して、遠隔授業観察システムについて明確になったこととして次の点が上げられる。

(1) 教室英語の量的・質的側面の把握

自分の英語と「その量が全く違っていました」「量やスピードが圧倒的に違っていました」あるいは「2～3文続けて話していらっしゃいました」などの意見に見られるように、教師の教室英語を量的に把握できていることがわかる。その一方で「一言一言に感情を込めて使っていた」「できるだけ英語で授業を進めようとする意志」といった意見からも分かるように、教師の教室英語に込められた感情や姿勢といった教室英語に現れる質的側面も十分に把握されているようである。

(2) 授業場面と展開に応じた教室英語

「復習も兼ねた内容をうまく取り入れていた」「ターゲットセンテンスを自然に導入するために、教室英語をどう取り入れていくかを構成する技術を感じた」「一時間を通して計画的に用いられている」などの意見からも分かるように授業場面やその展開の際にどのように教室英語が使用されているかについても気づきが促されたようである。

(3) 教室英語の背後にある教育的意味の把握

「英語での指示等が子どもにとって難しいものであったとしても、ほかの表現で言い換える」「生徒のレベルや授業の進度に合わせて英語を使い分けていた」「指示語や共有の表現は日本語での訳や説明をせず、文法など生徒に分りにくい表現を英訳してバランスよいサポートだった」といった意見からうかがえるように教室英語の背後にある教育的な意味機能も分析できていることが分かる。

以上を踏まえると、遠隔授業観察システムを通して、教師の発話の表面的内容だけでなく、その背後にある発話の意味機能をも読み取ることができることが分かった。

3.4 結果2 アンケート調査から

本授業の最後に受講生を対象に同システムに関するアンケート調査を実施した。このアンケートでは1) 映像、

2) 音声、3) 附属学校で行う授業観察との比較、4) 同システムを使用した授業全体、について5段階評価を用いて受講生の印象が尋ねられた。結果を下表に示す。

表：アンケート調査結果 (n= 8)

1. 映像について				
よい		どちらとも いえない		わるい
0	5	3	0	0
2. 音声について				
よい		どちらとも いえない		わるい
0	1	3	3	1
3. 教育実習時に附属学校でおこなった授業観察と比較して				
よい		どちらとも いえない		わるい
1	1	4	2	0
4. 遠隔授業観察システムを使用した授業全体について				
よい		どちらとも いえない		わるい
1	4	3	0	0

まず、遠隔授業観察システムが配信する映像については、上記結果と自由記述欄に書かれていた「だいたい見える」「見るのに支障はないと思う」などの意見を総合すると視覚的に十分な映像が提供できていると判断できる。ただし、「自分のみみたい部分が見れなかつたりする」「少し暗い…」「生徒の表情まで見るとさらによいかも…」などの意見があるように、改善の余地はありそうである。次に音声については数値的には十分でないとの結果を得た。具体的には自由記述欄に教師の発話は聞こえるが「生徒の声がもう少し聞ければよかった」「生徒の声が聞き取りにくかった」「周りの音はあまり聞こえなかった」とあるように教師の発話以外の音を十分に拾えなかったようである。また、教育実習時の授業観察に比べた場合、受講生の意見は二分する結果となった。自由記述欄にあった「先生のテンポのよさや教室英語の使い方など、とても参考になった」「先生が言っていることを集中して聞ける」などの意見からも分かるように観察の対象である映像や音声をある程度固定して観察すれば有意義な観察ができることが分かった。その一方で「先生と生徒の相互作用がつかみにくい」「実際にその場の雰囲気を覚える方が自分にはいい」「自分が注目したいところを見えない」「子どもの小さなつぶやきや、ワークシートの内容が把握できなかった」など同システムの限界点を指摘する意見もあった。そして、同システムを用いた授業観察全体の印象については概して肯定的・好意的な結果を得た。自由記述欄には、「現場に行かなくても授業観察ができるのは良いと思った」「生徒と先生のやりとりが見えるようになったり、改善していけばいいと思う」「カメラがたくさんあるので、様々な視点から見られる」「目的、意図が

あれば有効だと思う」「ビデオを撮られている」という緊張感が生徒にない（はず…）だから、自然な姿が見える」などと書かれていた。

4. さいごに ―今後の課題と方向性―

今回の遠隔授業観察システムを用いた試行授業を通して、明らかになった点をいくつか挙げたい。

まず、授業における教師の発話については量的にも質的にも十分に把握することができることがわかった。また、映像を通してその文脈を理解しながら観察するため、教師の発話の背後にある教育的機能を読み取ることも可能である。その一方で、教師と生徒のあいだのインタラクションにおける生徒側の発話が聞き取りにくいということが分かった。今回は教師による教室英語の分析を主要な目的としたためピンマイクを用いて音声を得た。結果的にそれが生徒の発話内容を聞き取れない結果を招いたと推察する。この点については教室内天井に設置されたマイクがどれだけ生徒の発話を獲得できるかの検証が求められる。

実際の教室における授業観察に比べ、大学の講義室において同一スクリーンを通して授業を集団で観察する際は、観察者個々人が自身の関心に依じて授業の展開や生徒の様子を見ながら柔軟に観察視点を変更していくことができないこと、また、授業の「その場の雰囲気」を十分に感じることができないこと、などの点が指摘された。これらの点は同システムの限界とも考えられるが、例えば現場観察時にしばしば行われるように、授業展開案や座席表などの資料や観察対象授業において使用される教材プリント類を観察時に配布するなどの、準備を丁寧に行えば、ある程度までは補うことができると考えられる。

以上を総ずるならば、授業観察の目的と観察の視点を予め明確にし、観察前にカメラ割の設定などに関する準備を確実に行うことで有意義な授業観察ができると考えられる。同システムの技術上の限界点もあるが、使用する上での工夫を積み重ね共有すれば、現場観察と同等の教育効果を得ることに加え、それとは異なる遠隔授業観察システムならではの教育効果を発揮することも可能である。例えば、観察の視点を統一し、その目的に応じたカメラ割を設定することで、同じ視点から授業を観察し、観察者同士で気づきを共有することでより深くかつ客観的な授業分析ができると考えられる。特に授業観察中に授業者の指導や生徒の学習を妨害せずに観察者同士で気づきを共有可能なことは同システムを使用する上での利点である。

引用文献

- 安藤昭一編（1991）『英語教育現代キーワード事典』東京：増進堂。
- 垣田直巳（1981）『英語科重要用語 300 の基礎知識』東京：明治図書。
- Krashen, S. D. (1987) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. New York; Tokyo: Prentice-Hall International.
- 望月昭彦編（2001）『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』東京：大修館書店。
- Swain, M. (1995) Three functions of output in second language learning. In G. Cook & B. Eidlhoff (eds.), *Principle & Practice in Applied Linguistics: Studies in Honor of H. G. Widdowson* (pp. 125-144) Oxford: Oxford University Press.
- 渡辺時夫（1995）「The Input Hypothesis（インプット理論）－MERRIER Approach のすすめ－」田崎清忠（編集責任者）、佐野富士子（編集コーディネーター）『現代英語教授法総覧』（東京：大修館書店）181-196 所収。
- 渡辺時夫・森永正治・高梨庸雄・斎藤栄二。（1988）『インプット理論の授業－英語教育の転換をさぐる』東京：三省堂
- 山森直人（印刷中）「英語教師に求められる英語力の概念的枠組みの構築」『鳴門英語研究』19
- 山森直人・菊地 章・藤原伸彦・草原和博・山木朝彦・鳥井葉子（2005）「学部教育の立場から見た遠隔授業観察システムの利用可能性」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』2, 7-16。